

「社会問題としての飲酒」

～ 酒害体験を聴いた学生の反応～

表 昭廣

(札幌北断酒会長・元札幌連合断酒会長)

北海道大学大学院分野別科目



「社会の認識」の講義枠内



「社会問題としての飲酒」

授業の目的

「酒害」からアルコールが社会に与える概念について学ぶ

1. 酒害が特別な人の問題ではないことを知る。
2. 社会の中にある「負の飲酒」に関連した問題として受けとめ、受講者一人ひとりの身近にある問題であることを知る。
3. 社会がいかに「酒害」を受け止めることを避けてきたかを知る。
4. 学生が医学的な知識を得るのではなく、社会的な問題であることを知る。

第42回全国札幌大会記念

H17.9.25



社団法人 全日本醸造連盟 第42回全国(札幌)大会



札幌市観光協会
札幌市観光協会
札幌市観光協会

札幌市観光協会
札幌市観光協会
札幌市観光協会



断酒会の規範

- 断酒会は酒害者による酒害者のための自助集団であると同時に市民活動団体である。
- 酒害相談と酒害活動を行い、広く社会に向かって酒害の恐ろしさを伝え、酒害者を一人でも多くださない。
- 過去に何も社会に貢献できなかった者が、社会に必要な人間になる。

内観療法の出会い

札幌太田病院に2度の入院で、「内観療法」を受け、飲んだ時の悪行を素直に認め、自分に真摯に向き合うことが出来ました。

「酒」ではなく「自分」の問題としての捉える事もできました。

「お陰様で、ありがとうございます」の言葉を素直に話せるようになり、断酒に繋がりました。

体験談も、客観的に捉え、当時の行動と心の動きを語る事ができるようになりました。

酒害体験に対する学生の質問

質疑応答で最も多かった質問

- (1) 飲みだしたきっかけは？
- (2) どのようにしたら、アルコール依存症になるのか？
- (3) どうして止めることができたのか？

上記の質問が8割あった。

科目名： 社会の認識

講義題目： 社会問題としての飲酒

受講者からゲストスピーカーの方へ (2013)

感謝をこめて

学生の感想(一部抜粋)

- ・ 『祖国には、断酒会のような自助組織がないため、酔っぱらいが朝から道端にいる』(中国からの留学生)
- ・ 『親がアルコール依存症なので、興味があった。アルコール依存症になって、奥さんや子供を傷つけたことを反省し、立ち直っていることが分かった。依存症の支援は相手に教えることではなく、体験談から気づいてもらうことが分かった。イネイブラーは飲酒の手助けなるが、イネイブラーがいなくなったら、孤独で死んでしまうかもしれないのが難しいと思った』

- ・『晩酌からアルコール依存症になる話を聞き、「晩酌」の言葉が恐ろしい単語に聞えた。酒とは何なのか分からなくなった。苦しむ前の楽しむ段階で酒を止めたいです』
- ・『話を聞いてイライラした。「だから何？」と言う気持ちになった。私は何があっても家族に当る人は最低だと思う。不幸自慢をされてるようで不快だった。私の人生計画で、アルコール依存症になる事は微塵も考えていないので、もし、自分もそうなってしまったらと考えると恐ろしいです』

批判的な感想もありましたが、素直に受け止め酒の恐ろしさを、伝え続けていかなければと痛感しました。

年々、学生がアルコール依存症の勉強していることに驚かされます。

今後、学生の感想をしっかりと集積し、今後に役立てて行きたいと考えております。

最後になりましたが、このような話す場と時間を与えて頂いたことに、感謝致します。